

活動報告

台北医学大学 日本老年ケア研修 —地域に根付く佐久市の連携システムについて—

廣橋雅子 (信州短期大学部 福祉学科)、高木琴代 (看護学部 看護学科)

TMU Japanese Long-term care study
—Cooperation System based on regionally-oriented for elderly care in Saku city—

Masako Hirohashi (Department of Shinshu Junior College at Saku University),

Kotoyo Takagi (Department of Nursing at Saku University)

Abstract: This is the report of international training course for TMU (Taipei medical university)'s nurses at Saku university. The purpose of this study was to understand the connection between Japanese Long-term care system and facilities or hospitals when elders need to be cared. Recently, Japanese caring system and its know-how is attracting attention to Asians, many countries want to send relevant people to do the study. Especially in Saku city, which is well-known for regional health care in Japan. Also, since the students of Saku university are taking the practical training of caregiving and nursing in hospitals and facilities. So, we contacted our practical training facilities attempting to arrange a short training for Taiwanese nurses to understand how regional long-term care is driving in this city.

キーワード: 日本式介護、台湾介護政策、国際交流、介護研修、地域連携、リハビリ、在宅ケア

I. はじめに

近年、少子高齢化現象が各国において深刻な問題として認識されている。日本はかつて経済大国だといわれていたが、いまでは高齢化が進み経済の傾きと共に、労働者人口の激減が懸念されている。このような情勢のなかで日本がアジア各国から注目を浴びている分野として近年目立つようになったのが「老年ケア」や「日本式介護」である。

2016年11月、佐久大学は看護学部と短期大学部福祉学科が台湾の台北医学大学（以下、TMU）からの看護師10名の研修を受け入れることとなった。多くの看護大学や福祉系短大が日本中にあるにもかかわらず、TMUが地方小規模大学である佐久大学に研修依頼をした経緯と、佐久学園が大学と短期大学部と連携をし、どのように研修を展開したかを以下のように報告する。

II. 依頼内容と対応について

2016年5月、台湾は初の女性総統・蔡英文氏が当選し、新政権によって、いくつかの大きな政策が掲げられたが、なかでも介護政策は最重要課題のひとつであった。2015年に「長期照顧服務法」が国会で可決され、現在、2017年施行にむけて準備中である。

台北医学大学（以下 TMU）は、台湾台北市に1960年に設立された大学附属病院である。現在、台湾には大学附属病院（736床）の他に萬芳病院（726床）と雙和病院（1130床）の合計3つの大学付属の病院がある。

TMUは医療機関のこれからの役割や地域での看護師の役割などを理解するために、地域医療の発祥の地に設置されている佐久大学を選び看護師10名の研修を申し込んできた。

1. 台湾事情と研修員構成

台湾は、近年アジアでも出生率が一番低く、少子化による高齢化が急速に進み、国家發展委員会の2016年〔中華民國人口推估（105至150年）報告〕によれば、台湾

の高齢化率は13.2%（2015年）であり、2017年には超高齢化社会の基準14%を超えるると推測される。2008年より日本のゴールドプランを真似た「長期介護10年計画」も残り1年となった。そこで、新たな法案に基づいた介護サービスを展開するに当たり、医療機関や介護機関、地域住民や外国人ヘルパーなどがどのように関わるようになるのか台湾国内でも大きな注目を浴びている。

当初、TMUより正式な研修要請が届いたときに記されていた研修生の背景は「臨床経験3年程度の優秀な看護師」を対象にするとあった。最終的に著者の一人の元に送られてきた名簿は臨床経験4年以上、ほとんどが7年以上のベテラン看護師であった。

看護師の所属専門領域としては、地域看護部門の看護師長を筆頭に、手術室の看護師、救急救命室の看護師長、脳神経外科病棟、内科病棟、予防医学、神経内科の看護師であった。

2. 研修目的と課題

カリキュラム作成の段階で、様々な領域で長年の経験のある台湾看護師たちにどのような内容を提供するべきか悩み、内容の構築に苦慮した。

一口に「日本の介護」といっても、それぞれの視点が異なると、同じ情報を与えても様々なとらえ方があり、誤解が生じる可能性があるかと懸念した。

まず、国際的な交流を進めるにあたり、目的とその求められる成果を明確にする必要があった。国の制度や風習、そして教育体制が大きく違う中でお互いが必要とする内容の共通認識を得るために、何度もメールのやり取りや来日の目的を確認する必要があった。

毎回、国外から研修の要請があるたびに、一番多く寄せられるのは「日本の介護が知りたい」、「日本の介護が素晴らしいから、なぜなのかを学習したい」という目的意識である。しかし、これは日本人が培ってきた歴史文化のなかで育まれた地域社会形成に必要な要素の影響がたくさんあり、単純に医療や看護、保険、介護の領域の講座を行えば理解できることではない。

そこで、視点を変え、日本が発信したい医療・看護に関する情報は何かを考えた。そして、大学が今まで行ってきた海外教育や著者らが培った国際交流経験の中で、地域医療の発祥地となった佐久地域における、医療、看護、介護の連携について学習してほしいと考え、カリキュラムの柱とすることとした。

3. 学習目標とカリキュラム構成

3週間の学習期間を3段階に分け、それぞれの学習目標にあわせ、学習場所を定めた。

第一週 基礎学習 8H×4日（33.5H）

学習目標：佐久大学内にて「語学・専門・文化」に分け、それぞれの領域の基礎学習をし、日本の医療のみならず、基礎的な知識を養う。

第二週 8H×5日（40H）

学習目標：佐久大学の実習施設でもある各医療機関や介護施設で現場学習をメインとする。それぞれの施設における多職種連携や地域連携など、臨地での実践をより詳しく理解する。

第三週 8H×5日（40H）

学習目標：前週に引き続き現場学習をした後に、理解しきれなかったことや、疑問に残ったことなどを振り返り、学内の教員と交流を重ね、最終的に、TMU研修員による学習報告をする。

Ⅲ. 学習内容の紹介

1. 第1週 学習内容

日本の介護保険制度や保障制度の話から始まり、地域看護や地域介護の基礎授業を行った。大学の講義スタイルで、一人の講師の講義時間は、1時間半と設定し、日本語で行い中国語の逐次通訳方式で進めた。

毎日8時間の授業は、参加者にとっては、かなりボリュームのある内容であった。2000年に日本の介護保険が施行された背景から今日に至るまでの内容を各担当の教員が短い時間のなかで伝えようとする情熱は、教室に同席した廣橋・高木にも伝わってきた。それを毎日のよ



図1. 介護基本授業風景

介護教員が説明する日本の介護福祉士に求められる専門性の説明をした



図 2. 日本語学習風景
体の部位を覚えるため、歌に合わせて遊ぶ



図 3. 補助器具などを手に取る
半身麻痺の方専用で使用できるスプーン



図 4. 訪問介護 出発前確認

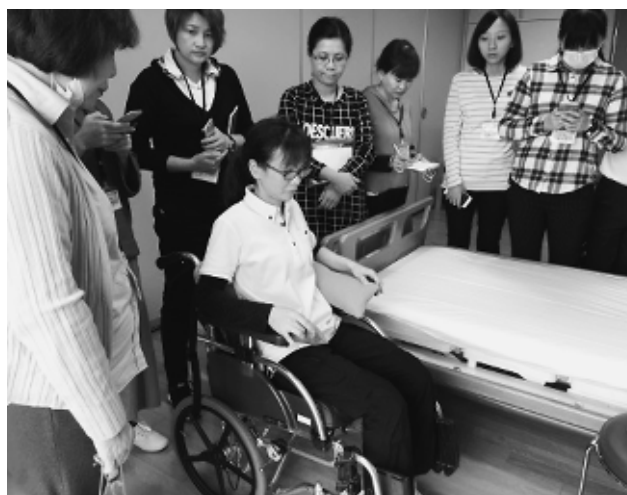


図 5. 特養で車椅子移乗講座

うに受け止めていた研修生の満足感と疲労感は言葉には表せないに違いない。

中でも介護実習室での演習講座では、多くの家庭でも使用できる補助器具を体験、信州短期大学部で常に学生にも伝えている介護コンセプトを盛り込んだことで、研修生は新しい発見をし、研修生同士での意見交換も活発に見られ、帰国後に取り入れたいという声も聴かれた。担当教員との交流も見られた。

2. 第 2 週 学習内容

佐久総合病院にて地域医療の歴史や地域連携によるケアに関して詳しく聞くことができた。また、地域ケア病棟の役割や、看護師としての立場からみた「老年看護」や「介護」に対する考え方や人材の育成についても看護部長の授業構成により、より深く説明を受けた。

訪問看護においては、毎日研修生 2 人が一人の看護師に同行し、患者の家を訪問し、日本の訪問看護システム

とそのケア方法などを実際に体験し学ぶことができた。また、患者の家に上がることにより、日本家屋を初めて体感でき、日本の農村地域の高齢者の住環境も理解することができたことを喜んでいた。

病院でケアを受けた高齢者の生活の場がどこに移るのかという疑問に対し、台湾にはない「老人保健施設」も視察先に組み入れた。

特別養護老人ホームの視察には、3 日間に及ぶシルバーランドみついの現場研修と職員交流を設定した。施設では、車椅子移乗や食事介助、利用者の一日の流れなど演習を交えて細かく指導していただいた。

過去の国際研修では、参加者からさまざまな職種を理解するのが難しいとの声があった。そのため、シルバーランドみついの事前打合せの際、施設で働くすべての職種の方を集め、研修生 10 名との意見交流会を 2 時間セッティングすることとなった。その中で、台湾では馴染みのない生活相談員や管理栄養士などの資格取得条件



図 6. 特養施設における多職種連携の紹介



図 7. 鹿教湯病院のリハ室の様子



図 8. 善光寺観光



図 9. 福笑い体験

や施設での役割と仕事内容、そして職場における他職種との連携など、研修生からの質問に対し、それぞれの職種の方による説明で学習をすすめ理解を深めることができた。

3. 第3週 学習内容

台湾でも多くの高齢者がリハビリを必要とする割合が高いが、毎日のようにリハビリに通うことが困難であるという状況のなかで、日本のリハビリ体制を知りたいと要望があったため、第3週の2日間、鹿教湯病院にてリハビリについて学習をした。もともと温泉が有名な鹿教湯にリハビリ病院を設立したのも、温泉療法を行っていたという歴史背景や、地域病院との連携や、地元の方の思いなどが作り上げたリハビリを専門とする病院であるということを学生は2日に渡り学習し理解した様子であった。

ここでは、医師や看護師のほかに、作業療法士、理学療法士、言語療法士など多くのリハビリを専門としたス

タッフが在籍し、また介護福祉士も多く働いており、他職種間の連携や鹿教湯病院内の仕事の役割を細かく説明していただいた。

4. その他の学習

看護や介護の専門的な知識学習もさることながら、この三週間の中で、日本の文化や生活を少しでも理解してもらうことを目的に、週末の時間を使って電車を利用して古寺に行ったり、日本語の授業で伝統的な遊びなどを取り入れた。

日本の寺院は海外からの研修生にとっては、必ずといっていいほど訪れたい場所でもあるため、長野市にある善光寺へと案内した。参道から立ち並ぶお店をゆっくりとのぞきながら、本堂へと向かい、宗派に関係ない日本の仏教寺院を参拝した。日本の御守はお土産に買い求める人が多い。仏教信者が多い台湾ではあるが、国が違えば宗教に求めるものも違い、廣橋・高木は一路、日本と台湾の宗教の違いなど研修生と交流を交わした。

また語学の授業では、言葉の裏に隠されている日本の文化を伝えることを目的に 12 時間ほど組み入れた。日本語を覚えることに重点を置かず、施設や病院でよく耳にする生活用語の紹介や福笑い、折り紙の紹介をした。印象的だったのは、日本の温泉の入り方などの礼儀作法について質問があり、特に髪長い女性はどのように髪を洗うほうがいいのか、また良くテレビで見る頭の上に乗せているタオルは何のためなのかとも訊かれ、著者らは日台の温泉文化、風呂文化の違いについても研修生と楽しく意見を交わした。

IV. 研修生からの感想

大学の教員、病院や施設の指導者がすべてを伝え、それを理解してもらうには 3 週間という時間は長いようで短い時間であった。研修生のそれぞれ持つ専門性が違う中でどのように感じたか、最終日の発表会で発表がされた。1 グループ 2～3 名がひとつのテーマに焦点をあて、自らの感想を述べた。その内容を下記のようにまとめる。

発表内容は 5 つのテーマに分けて行った。1. 急性期医療と地域連携（退院準備）、2. リハビリケア・補助器具の発展と応用、3. 認知症ケアについて、4. 介護福祉士訓練と発展、5. 見取りケアについて、であった。

1. 急性期医療と地域連携（退院準備）

まず、佐久総合病院では、入院から退院までのシステムが台湾に比べ整っていたことが印象的であった。メディカルソーシャルワーカーと看護師が地域連携室という同じ部屋で仕事をし、患者のための入退院連携が図れるのはとても効率的で便利である。

また訪問看護が充実していたことに驚いた。台湾では重症者が多くの訪問看護の対象になっているのに比べ、日本では疾病はあるが、ADL 自立度の高い対象者もいた。

介護施設では施設が利用者にとって「家」と同時に、スタッフにとっても自宅であるという意識付けに感服した。

施設評価に関して、台湾と日本の違いに感銘を受けた。台湾では民・官・学の有識者により数百にも及ぶチェックリストによって行われるが、今回の研修中に見学した介護施設の「第三者評価」では、お茶を飲みながら、地域住民や利用者家族も交え、この地域で必要とされる施設になるために皆様からの忌憚りの無い意見の交流が行われており、地域に根付く施設のありように感動した。

2. リハビリケア、補助器具の発展と応用

鹿教湯病院での入院診察は衝撃的であった。患者のベッドサイドに医師、看護師、PT、MSW、本人、家族、すべての入院中に関わる職種が集まりカンファレンスをし、リハビリ計画を立案する現場を見させてもらった。その効率の良さや情報の共有の正確さがまさに台湾に必要だと考えた。

補助器具に関しては、台湾と日本では同じ問題や課題を抱えていると思われるが、対応の方法が違うと考えた。日本は自立心、尊厳のために補助器具が使用されているが、台湾では機能面だけであるため、利用者の尊厳を傷つける場合がある。

また日本では中古販売やレンタルの信頼度が高く、利用率も台湾より高い。台湾がこの点の普及率を上げるには、メンテナンスや消毒を徹底し、政府の規定の見直しや利用者へのアセスメント等、専門員の専門性を高める必要があると思った。

3. 認知症ケアについて

3 週間の研修の中で、看護の基礎に立ち戻ったような思いである。どの領域、どの健康レベルにおいても認知症ケアに大切なことは相手の背景を知る、思いやる心、共感する、尊重する、プロセスに寄り添う、ということを教わりました。

台湾ではいまだに車椅子やベッドにいる患者を拘束し、病院の治療に従うことが看護であるのに対し、日本の急性期ケアにおいてはその患者の自立を促すような支援やケアを提供していた。

これらは、自国の台湾国内の医療と看護環境を省みるととてもいいチャンスだと思う。

4. 介護福祉士訓練と発展

台湾の介護士は資格や職務が統一されていない。台湾では介護現場の看護師の助手的な存在であるのに対し、日本の介護福祉士はさまざまな養成ルートがあり、国が認める国家資格であることは、それだけ専門性があるということを理解できた。また、台湾では介護人材が不足しているため、外国人労働者が多い。それらの人材は専門性が低く、語学力も低いいため、台湾文化がなかなか理解できないため、利用者とのコミュニケーションも問題が生じている。

しかし、台湾も日本のように専門性の高い介護士の養成を試みている段階なので、そのための努力もしたい。

5. 看取りケアについて

訪問看護が24時間体制であることにまず驚いた。台湾では、多くの人が病院で亡くなるが、日本は在宅での死を希望している人が多いと知った。介護施設でも家族がそばにいて看取りができるような配慮がなされていた。看取りの専門の部屋が用意され、さよならの儀式もあり、ソフト面でもハード面でも見取りを大切にしていること日本の文化の一面が学べた。

また感心したのは、施設には「しのぶ会」というものがあり、亡くなった方を家族だけでなく、施設の関わった職員も一緒にしのぶことであった。台湾に戻った後、私たちが患者側にもう少し寄り添ってケアをすることも考えたいと思う。

V. さいごに

「交流」とは、大辞林辞書によると、異なる地域や組織に属する人や物が互いに行き来すること、とある。相手国のことを理解すると同時に、自国のことを異なる角度からみることで自己を知る、それが国際交流ではないだろうか。

3週間の研修でもっとも大事にしたことは、日本の良さだけを見せるのではなく、台湾との相違点をお互いに見出しながら、それぞれの看護介護環境がよくなるための糸口を見つけるきっかけになればよいと思いながらカリキュラムを組み立てたことである。

佐久地域の長い歴史の中で培われた地域医療の体制は、失敗と積み重ねから生まれた成果である。それを短期間に事細かく伝えることは不可能だが、医療現場、看護現場、介護現場、教育現場にいる人々が同じ「ところ」をもってこの地域連携を担っていることを理解してほしい

った。

著者らは教員として、このプロジェクトを進めるに当たり、領域外の方へ説明し、台湾への理解も得ることから始めた。それは、佐久大学の特徴のひとつでもある、看護と介護の学内連携でもあった。他領域の教員からの理解を得て、協力を仰ぐことがどれだけ大事であるかを我々も学習することとなった。

真の国際化にむけ、佐久大学はアジアの看護介護の模範となる教育をめざし、これからの国際交流に貢献したい。

謝辞

佐久総合病院、シルバーランドみつい、佐久総合病院訪問看護センター、医療センター、鹿教湯病院など、多くの実習機関の理解と協力を心より感謝いたします。また大学内の先生方の惜しみない講座担当と調整および看護と介護の教育連携にも感謝いたします。

注釈

- i 中国語原意は「長期間面倒を見るサービス法」であり、台湾の介護サービス法を意味する。

【参考文献】

- 1) 台湾国家發展委員会 (2016), 中華民國人口推估 (105 至 150 年) 報告：
http://www.ndc.gov.tw/Content_List.aspx?n=84223C65B6F94D72, 2017/01/20.